



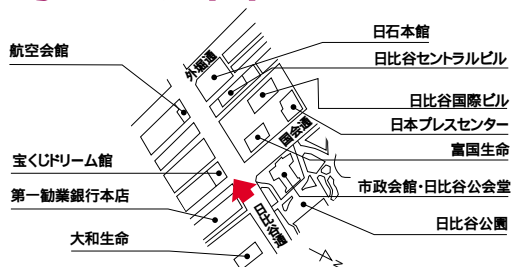
消えた街角:富岡畦草・記録の目シリーズ

昭和39年「内幸町一丁目」

この周辺には、放送会館、日産館、富国生命ビルなど昭和初期に建てられた重厚な建物が並んでいた。放送協会は、昭和二十七年までは占領軍の管轄下であり、NHKはその中で小さく納まっていたが東京オリンピックの世界初の実況衛星放送を契機に代々木の新館へ移転していった。昭和四十八年まで使用されていたが取り壊されその跡に昭和五十八年、日比谷シティというスケートリンクまで備えたコミュニケーションが生まれた。日産館、富国生命ビルもそれぞれ近代的な建物に。

写真左側では、かつて木造の売店があり宝くじを売っていたが、現在は、「宝くじドリーム館」が建っている。ちなみに昭和二十年十月にスタートした庶民の夢「宝くじ」の第100回の値段は、一枚十円で等は十万円。サラリーマンの月給は、平均二百円前後であった。

(昭和三十四年七月三十日 撮影)



写真右側に見える高層ビルの間に日比谷シティがある。日比谷シティは、日比谷国際ビル、富国生命ビル、プレスセンタービル、日比谷セントラルビルの商店街と屋外広場を合わせたエリアを総称して名づけられた。この屋外広場では毎年冬、ニューヨークのロックフェラーセンターをモデルにしたスケートリンクが開催されるなど、多数のイベントが1年を通して行なわれている。写真左側に見える「宝くじドリーム館」は、昭和56年12月に日本宝くじ協会と第一勧業銀行によって開設。宝くじの常設PRセンターは世界でも例がなく、抽選会はこので行なわれている。宝くじの誕生以来、発売累計額が10兆円に到達。我々が夢を託す姿は、今も昔も変わっていない。

(平成13年3月7日 撮影)